

## 習慣的に日記を綴る体験の検討

### 問題と目的

日記には、他者に見せることを前提とした公開日記と、自分のみが見る非公開日記が存在する。先行研究において、日記は感情の浄化をもたらすとされてきたが、その影響には正負の両面があり、書き手が具体的にどのようなプロセスで心理的変容を遂げているのかは十分に明らかにされていない。本研究は、習慣的に非公開日記を綴る体験に着目し、日記をつける行為がどのような心理的変化をもたらすのか、その人にとって日記がどのような存在として位置づけられているのかを検討した。

### 研究方法

本研究では、習慣的に非公開日記をつけており、日記をつけることに何らかの心理的作用を感じている方、それによって自身へのまなざしが深まった実感を持つ4名を対象とした。半構造化インタビューを実施し、ナラティブ分析を行った。

### 結果と考察

分析の結果、対象者において、日記の役割は当初の出来事の記録や感情の発散という目的を超え、自己を支える精神的な基盤へと変容していたことが明らかになった。具体的には、書く行為そのものが感情の対象化と自己調整の機能を果たしている。書き手は、思考を言語化して整理すること

で、混沌とした内面を客観視していた。こうした記述プロセスは、感情的な自分と論理的な自分を調整するスイッチのような役割を担い、精神的な均衡を保つ手段となっていた。また、蓄積された過去の記述は自己の連続性と存在の証明として機能している。物理的なノートの量や過去の記録は、困難を乗り越えてきた証や未来への保険として認識されていた。書き手は過去・現在・未来の自分をつなぎ合わせ、揺らぎやすい自己の存在価値を確かなものとして再確認していた。さらに、非公開日記は、心の安全基地、あるいは対話相手として重要な位置づけを持っていた。他者の評価にさらされるSNSや実際の人間関係とは異なり、日記は無条件に本音を受け止めるパートナーや親の代わりと見なされていた。書き手はこの安全な空間で、過去の自分や内なる声とキャッチボールを行うことで、他者評価に依存しない自己受容を育んでいた。

現代の若年成人にとっての非公開日記は、本来の自分を取り戻すための能動的な心理的適応装置として機能していると言える。

## バイセクシャルアイデンティティの検討

### 研究目的

本研究は、バイセクシャル当事者の語りの検討を通じて、バイセクシャルを自覚した経緯や、バイセクシャル当事者の特有の問題や体験、バイセクシャルであることをどのように捉えているかを明らかにすることを目的とした。

バイセクシャルには、同じ性的マイノリティでも、同性愛者からも理解を得にくいという、バイセクシャル特有の問題がある。バイセクシャルは、ゲイやレズビアンに比べて心理的健康度が低いことなど、メンタルヘル스에問題を抱えていることが多い。しかし、当事者本人が認識している、バイセクシャルとしてのポジティブな側面が、心理的健康を高めることも明らかになっている。本研究では、バイセクシャル特有の困難や体験に加え、本人が感じているポジティブな側面についても、検討することを目的とする。

### 研究対象者・研究方法

本研究では、以下の7点を満たす方を対象とした。

1)バイセクシャルを自認しており、2)男性と女性の両方に恋愛感情を抱いた経験がある、3)20歳以上の方。バイセクシャルは、性的指向のみで分類されるため、4)本人の生物学的性別や性自認については問わないこととした。5)バイセクシャルであることに対して強い拒否感を抱いていない方、6)過去の経験が、現在の日常生活や心理的安定に深刻な影響を与えておらず、7)一連の体験を語ることに大きな精神的負担を生じることのない方を条件とした。

計3名の対象者に、約60分の半構造化インタビューを実施した。インタビューは、同

意を得たうえで録音をし、逐語録を作成した。その後、ナラティブ分析を行った。

### 分析結果・考察

対象者3名は、最初は異性に好意を寄せる経験をした後、同性を好きになることをきっかけに、バイセクシャルであることを自覚していた。メディアを通じた知識の獲得、他者からの肯定的な受け入れ、性的マイノリティ当事者との関わりによって、バイセクシャルであることを深く自覚し、認めていた。また初めて同性を好きになったとき、周囲から否定的な反応をされないことが、同性を好きになることへの肯定的な受け入れにつながっていた。

バイセクシャルは、異性を好きになれるというマジョリティ要素を持っていることから、同性愛者とは異なる扱いを受けていた。また、関係性の悪化恐れ、友人を恋愛対象としてみることへの抵抗を覚えることや、異性愛者パートナーへのカミングアウトが難しいことなどが、バイセクシャル特有の体験として明らかになった。

対象者は、主に同性を好きになる経験を肯定的に捉えられているかどうかが、バイセクシャルであることの前向きな受け入れに大きく影響していた。同性愛者やバイセクシャル当事者と関わることで、同性を好きになることの葛藤が小さくなった経験や、同性を好きであることを他者から受け入れられた経験などによって、バイセクシャルへの抵抗が減ようになったこと、バイセクシャルを前向きに受け入れていることが明らかになった。

同性愛者・バイセクシャルコミュニティで繋がりをもて、安心感を得ることができるといったポジティブな側面も明らかになった。

## 不本意な進学を受け止めの検討

### —高校卒業後の浪人経験に焦点をあてて—

#### 研究目的

本研究の目的は、浪人をしてまで第一志望にこだわり、大学・専門学校受験に取り組んだものの、その頑張りが報われなかった者が、不本意な進学を学生生活の中でどのように消化していったのかについて、明らかにすることである。第一志望に合格するために頑張ってきた受験勉強が、不合格という結果に終わる場合には、心理的ストレスが生じる。特に、浪人生は、第一志望に対して非常に高い重要度を認識しており、再度、受験勉強に取り組んで不合格となった場合、挫折感も深いと予想される。一方で、第一志望に合格できなかった場合であっても、新たな目標が見つかったり、結果として得られた現在の大学・専門学校での環境や人との出会いが満足できるものであったりするならば、挫折経験を前向きに解釈できるようになると考えられる。本研究では、そうした体験の詳細を明らかにし、対象者にとって何が挫折であったのか、加えて、大学・専門学校という場で学生が何を心得、どのように成長しているのかを検討する。

#### 研究対象者・研究方法

本研究では、以下の4点を満たす方を対象者とし、年齢や性別、浪人した年数は問わなかった。

1) 浪人をして第一志望の大学・専門学校に挑戦したが合格できなかった方で、2) 浪人を終えた時点での受験結果に満足しなかったものの、3) 現在は挫折経験としての大学・専門学校受験が自分の中で消化されている、4) 大学・専門学校三年生以上の現役の学生。

計3名の対象者に、60分～90分の半構造化インタビューを実施した。インタビューは同意を得た上で録音し、逐語録を作成した。その後、ナラティブ分析を行った。

#### 分析結果・考察

分析の結果、第一志望校不合格という経験は、対象者にとって単なる失敗ではなく、それまで前提としていた価値観や自己像を揺さぶり、自己理解の再編を促す出来事として機能していたことが明らかになった。同時に、努力や能力、将来像に関する思い込みを脱却する契機となった。

挫折経験の意味づけにおいては、社会的評価や他者の期待といった外的基準から、自身の納得感や実感といった内的基準へと価値の重心が移行していく過程が共通して認められた。大学のネームバリューや進学条件へのこだわり、特定の場所や理想像への憧れは、浪人生活や現在の学生生活を通して相対化され、「自分にとって何が重要か」「どのようでありたいか」といった内省的な問いへと置き換えられていた。

浪人生活および現在の学生生活は、挫折を否定的経験として固定するのではなく、成長経験として再位置づけるための時間として機能していたことが示された。対象者は、自己の弱さや限界への理解、努力を積み重ねた経験の肯定、他者との関係性や実践を通じた価値観の形成などを通して、挫折経験を現在の自己を支える基盤へと変容させていた。

## 日本社会と家族をつなぐ外国人ヤングケアラーの体験の検討

### 研究目的

近年、日本に居住する外国人は増加しているが、日本語能力や日本の制度・文化に関する知識の不足から、就労や行政手続きに困難を抱え、十分な支援にアクセスできないまま孤立する外国人家庭も少なくない。こうした状況の中で、家族の中で最も早く日本語を習得し、日本の学校教育を通じて社会に適応した子どもが、通訳や行政手続きの補助といった本来大人が担うべき役割を引き受け、家族を支えるケースがある。本研究では、日本に暮らす外国人家庭において、家族の日本での生活を支えてきた子どもをヤングケアラーとして捉え、ケア内容やその実態、生活に及ぼす影響、当事者の考えを明らかにすることを目的とする。

### 研究対象者・研究方法

本研究では以下のすべての条件を満たす方を対象者とした。1). 海外から日本へ移住し、日本社会への適応に困難を感じる家族のために、18歳に至るまでの間にケアを担った経験のある方で、現在18歳以上の方。2). 1990年代以降に来日した方、またはその家庭で育った方。3). 日本の学校教育課程に基づく学校に通学した経験のある方。4). 現在、ケアを継続しているかいないかは問題としない。5). ケアの種類、年齢や性別、国籍、出

生地は問わない。6). 家族を支える体験について、心の安寧を保ってお話できる方。計3名の方に、90-120分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューは同意を得た上で録音し、逐語録を作成した。その後、ナラティブ分析を行った。

### 分析結果・考察

対象者が担ってきたケアは、病院や行政機関での通訳、学校からの連絡の対応など、主として親が日本社会と関わる際に生じる言語的・制度的な困難を補うものであった。ケアは、生活の一部として継続的に行われていた。ケア経験が生活に与えた影響は対象者によって異なり、心理的負担として現れる場合もあれば、将来の選択を制限する要因として現れる場合もあった。一方で、家族に頼られることを肯定的に捉え、自尊心の高まりや家族との結びつきの強さとして意味づける語りもみられ、ケア経験は一様に否定的なものではなかった。対象者はいずれも複数の国を移動した経験を有しており、そのうち2名は、十分な親子関係が形成されないままケア役割を担っていたという特徴がみられた。新たな環境への適応と並行して親を支える必要があったことは、日本人ヤングケアラーとは異なる困難を生じさせていたと考えられる。

## 高校生運動部活動における挫折体験の検討：公式戦に出られないという体験に

### 焦点を当てて

#### 研究目的

本研究では、高校生時代に運動部に所属しながら、公式戦に出られなかった経験を「挫折」として捉えた者を対象とし、インタビュー調査を行った。ここでいう挫折とは、主観的価値、特に達成価値を感じていたことに対する失敗体験であり、無力感や絶望感を伴う出来事を指す。本研究では、このような経験をしながらも部活動を継続し、その過程で自分なりの目標を見出していった者の語りに着目した。分析を通して、①挫折体験をどのように捉えているのか、②その後どのような思いで部活動に向き合っていたのか、③挫折体験を通して目標や部活動の意義をどのように再構成していったのかを明らかにした。

#### 研究対象者・研究方法

本研究では、以下のすべてに当てはまる方を対象とした。

- 1) 高校生時代に運動部に所属しており、公式戦に出られないという体験をした方。
- 2) 公式戦に出られない体験を自分自身の挫折体験としてとらえた方。
- 3) 挫折体験をした後も部活動を続け、新たな目標・意義を見つけた方。
- 4) 現在大学生の方で、性別は問わない。
- 5) 高校生時代の部活動体験を心

の安寧をもって語るができる方。

計5名の対象者に、60～90分の半構造化面接を行った。インタビューは同意を得たうえで録音し、逐語録を作成した。その後、ナラティブ分析を行った。

#### 分析結果・考察

分析の結果、挫折体験は、単なる失敗や否定的出来事として固定的に捉えられるのではなく、競技の継続や振り返りを通して意味づけが更新され続ける経験であることが示唆された。また、公式戦に出場できない経験は必ずしも部活動に対する動機の低下に直結するのではなく、競技への関与の仕方や動機の方向性を変化させながら部活動が継続される可能性が示された。

さらに、本研究の対象者の語りからは、先行研究において部活動を通して獲得されると示唆されていた「へこたれない力」や「自己肯定感」といったライフスキルに関連する内容も確認された。加えて、挫折経験後に辿る過程には、見通しを一時的に失い回復していく過程、見通しを維持したまま競技を継続する過程、目標の内容を再構成する過程など、複数のパターンが存在することが明らかとなった。

## アニマルセラピーの社会的理解の向上へむけて —アニマルセラピストの経験に焦点を当てての検討—

### 研究目的

本研究では、職業またはボランティアとして継続的に、高齢者、病院、障害者施設を訪問して、アニマルセラピーを行うアニマルセラピストにインタビューを行った。アニマルセラピストの語りを通して、1)アニマルセラピーの現場の様子、2)アニマルセラピストが感じている動物との触れ合いがもたらす効果、3)アニマルセラピストが現場で感じる課題を明らかにした。

### 研究対象者・研究手法

研究対象者は、職業またはボランティアとして継続的に、高齢者施設、病院、障害者施設を訪問して、アニマルセラピーの活動を専門的に行っているセラピストとした。現場経験に基づく語りを得るため、活動期間は2年以上と定めた。現在、体験について心の安定を保ちながら語ることでできる状態にあることを条件とした。

3名を対象に、60分程度のインタビュー調査を実施した。インタビューは対象者の許可を得て録音をした後、逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

### 分析結果・考察

アニマルセラピーは高齢者施設や病院、ホスピス病棟、児童養護施設、大学、企業など、多様な現場で実施されている。活動者は対象者の年齢や、健康状態に応じて柔軟に

形を変えながら犬と触れ合えるように意識をしていた。動物との触れ合いでは、撫でる、そばに寄り添うといった関りを通して、対象者に安心感や心の安定をもたらし、表情の変化や発話などポジティブな変化を生み出しているという活動者は捉えていた。

アニマルセラピーにおける「いやし」は、治療や問題解決そのものではないものの、一時的であっても「回復へのきっかけ」となっていることが明らかになった。人と動物との触れ合いによって得られる癒しに加え、動物を介して生まれる人と人との繋がりそのものが癒しとなることも明らかになった。

活動者は、他者の役に立っているという実感や、やりがい活動継続の原動力となっている。活動者は皆、アニマルセラピーをしていてよかったと活動を肯定的に捉えている。

犬を介して、障害や犯罪者などの社会的なラベルであったり、世代や年齢の壁を越えて一人の人間として関わるができる。アニマルセラピーをしていなければ、繋がらなかった人々との関係に活動の意義を感じていると考えられる。

## アセクシュアル当事者が築く親密な関係の検討

### 研究目的

本研究の目的は、「他者に対する性的欲求の欠如（ない、程度が低い、経験しない）」と定義されるアセクシュアルを自認する当事者が、どのような親密な関係を築いているのか検討することである。アセクシュアル当事者は他者に性的に惹かれないという特性上、性愛を伴わないパートナー関係を志望する傾向にある。しかし、「他者に性的に惹かれることが当然である」という強制的性愛規範によって、当事者が性愛を伴わないパートナー関係形成に困難を抱えることが指摘されている。

本研究では、そのような社会規範との関わりのなかで、アセクシュアル当事者が築く親密な関係のプロセスと様相を明らかにした。

### 研究対象者・研究方法

本研究では、以下の4点を満たす方を対象とした。年齢や性別、自認からの年数、パートナーの性別は問わないこととした。

1) 自身がアセクシュアルに該当すると考えている方で、2) 自身がアセクシュアルであると認識した後に、他者と特別な関係を約束した経験のある方。3) 自身のセクシュアリティにまつわる葛藤に関して、一定程度心理的に解消しており、4) 一連

の体験を語ることに大きな精神的負担を生じることのない方。

計4名の対象者に60～90分の半構造化インタビューを実施した。インタビューを同意の上で録音して逐語録を作成し、ナラティブ分析を行った。

### 分析結果・考察

分析の結果、当事者が親密な関係を築く過程のなかで、社会規範と距離を取りなおす実践が見られた。当事者は当初「人は他者に性的に惹かれる」という規範を内在化していたが、自分が性的に惹かれない体験をしたことによって規範との衝突を経験していた。アセクシュアルを自認後、当事者はパートナー関係に性愛や恋愛の要素は必須でないと捉えなおすことで、性的に惹かれない自己を肯定し、社会規範と適切な距離を保とうとしていた。

「性愛を伴う異性間の排他的関係」という既存の親密性モデルと比較し、アセクシュアル当事者の築く関係には、1) 性的なつながりを必須としない、2) 恋愛と結婚の切り離し、3) 排他的な二者関係を前提としない、という3点の相違点があった。

アセクシュアル当事者は、既存の親密性モデルを解体し、創造的に親密な関係をデザインしていた。

## 青年期女性の痩せ願望の心理

### －ダイエット経験を通じて－

#### 研究目的

本研究では、青年期女性の1) ダイエット経験に焦点を当て、持続的に痩せ願望を持つ女性が、2) 自身の外見や身体をどのように捉えているのかを明らかにすることである。現代社会には、低体重を理想とする価値観が強く存在する。青年期女性の中には、健康上に問題がなく、ダイエットをする必要のない女性でも、「痩せたい」「ダイエットしなければ」という痩せ願望を抱く者は少なくない。痩せすぎは、身体に不調を引き起こし、将来や次世代の子どもの健康を損なう可能性がある。さらに、過度なダイエットは、摂食障害を誘発するリスクがある。それでもなお、青年期の女性がなぜ痩せたいという思いを抱くのかを、社会的、個人的背景を視野に入れて探究する。

#### 研究対象者・研究方法

本研究では、1) 18歳から29歳の日本人女性で、2) 自身の身長や体重、BMI上を回答することに対して抵抗のない方、3) 現在は危険なダイエットを行っていない方、4) 適正体重やそれよりも痩せていたのにも関わらず、過去に痩せなければいけないという考えに囚われた経験があり、5) 過去も現在も摂食障害の診断を受けていない方。以上の1)～5)の全てを満たす方を対象とした。4名の対象者に、60分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューは対象者の同意を得た上で録音し、インタビュー内容を逐語録に起こした後、ナラティブ分析を実施した。

#### 分析結果・考察

対象者は一度体型を意識し始めてから現在

に至るまで、常に痩せたいという思いを根強く持っているが、痩せ願望とダイエット行動は必ずしも連動していないことが判明した。対象者は、ダイエットをしていないときも、「痩せていること＝かわいい」、「華奢な身体は女性として価値がある」という揺るぎない信念を抱いていることが明らかになった。対象者4名中3名は、小学生時代に体型への意識が芽生え始めた。青年期以前の成育環境の中で、細いことが望ましいという価値観が刷り込まれていったことが考えられる。

強い痩せ願望に基づくダイエットでは、過度な食事制限や運動が行われた。対象者は、心身の疲労に限界を感じながらも「さらに痩せたい」という痩せの執着心を強めた。過度なダイエットの順応は、痩せ願望を強化し、心身の健康に悪影響を与える可能性が示唆された。

対象者の語りからは、将来にわたって痩せた体型を維持し続けなければいけないという強迫的な認識や、痩せへのこだわりが消えないことに対する苦悩が窺われた。対象者は他者からの見られ方を強く意識していた。その結果、自身の体型が理想像から外れると、自尊感情が低下し、情緒的な不安定さが生じていた。海外留学を経て体型に関して新たな価値観を得た対象者は、痩せて細くなることよりも、自分らしく健康的な身体でいることを重要視していた。現代の痩せ志向や美意識が強い社会的風潮は、自己の在り方を模索する青年期の女性に生きづらさや葛藤をもたらしていることが考えられる。

## アイドルファンの「同担拒否」の検討

### 研究目的

同担拒否とは、同じアイドルを応援している他のファン(同担)との交流を拒絶する態度や、それに伴う排他的な行動を指す。

本研究では、アイドルファンの同担拒否がどのような体験であるのかを明らかにし、同担拒否をする者がアイドルや周囲のファンに対して抱く心理について検討することを目的とした。インタビュー調査を通して、同担拒否の一連の体験を明らかにし、外から見えにくいファン心理や行動、ファンコミュニティの実態について考察した。

### 研究対象者・研究手法

本研究では、以下の4点をすべて満たす方を対象とした。1) 歌やダンスを活動の中心としている歌手アイドルを2年以上応援していた方、2) 過去に1年以上同担拒否をしていた経験を持つ方、3) 現在は同担拒否をしていない方であつ、4) 同担拒否をするまでの経緯や具体的な応援行動の内容について伺うため、同担拒否をしていた当時の記憶を鮮明に思い出すことができる方。年齢や性別は問わなかった。

3名の調査対象者に、60分程度の半構造化インタビューを行った。同意を得たうえでインタビューを録音し、逐語録を作成したのち、ナラティブ分析を行った。

### 分析結果・考察

対象者3名は、いずれも他のファン(同担)へのファンサービスを見たことをきっかけに同担拒否になる経験をしていた。ファンの間で「推しから特別な振る舞いを受けられる者」と

「受けられない者」という差を生み出すファンサービスは、同担への嫉妬心や競争意識を喚起し、同担拒否を引き起こす要因となっていることが考えられる。

同担への拒否感を反映する回避行動の程度は、同担への関心の強さによって決定されることが明らかとなった。同担の言動を強く意識していた対象者2名は、SNSのブロック機能を用いて、自身から同担を遠ざけようとした。

同担拒否をしなくなる経緯は、それぞれ異なっていた。しかし、いずれの対象者においても、推しの活動体制や自身の人間関係の変化など、大きく環境が変わることが同担拒否をしなくなる要因になっていた。同担への拒否感は、応援しているアイドルが順調に活動し、自身が応援に没頭できるという、ファン活動の前提の揺らぎに影響されることが明らかとなった。

対象者3名のうち2名は、現在同担との交流に対して肯定的であった。2名は、「自身にとっての同担の位置づけ」や「同担への拒否感を生じさせる要因」について再考することで、同担との交流に対して肯定的に考えられるようになっていた。

対象者3名は、同担の言動や同担とのトラブルに精神的苦痛を感じてもなお、推し活を続けるために「同担拒否」という回避行動を用いた。ネガティブな体験をしたにも関わらず、人生における楽しみや幸せを得るために、アイドルを応援し続けようとする当事者の姿から、「推し活」が持つ依存性や、日常生活における精神的な救いとしての側面の強さが明らかとなった。

## 地雷系ファッションを身に纏う体験 —ファッションにおける自分らしさの表現—

### 研究目的

本研究の目的は、若い女性たちが「地雷系ファッション」を通してどのような自己表現を行なっているのかを明らかにすることである。地雷系ファッションは、黒やピンクを基調とした「病み可愛い」要素を特徴とするスタイルで、ソーシャルメディアを通じて広まった。このファッションはしばしばネガティブなイメージで語られるが、身につける本人にとっては自己防衛の手段として機能している可能性がある。本研究では、地雷系ファッションを好んで身につける女性たちに焦点を当て、彼女たちがこのスタイルに込める意味や自分らしさの表現について検討する。

### 研究対象者・研究方法

本研究では、以下の条件を満たす方を対象者とし、調査を行った。1) 地雷系ファッションの流行が始まったと考えられる2019年ごろに10代後半から20代前半であった、現在22歳から30歳までの女性、2) 自分の意思で地雷系ファッションを取り入れた方、3) 地雷系ファッションを1シーズンを超えて着用していた方、4) 地雷系ファッションとの出会いから、自身のファッションに取り入れるに至った具体的なエピソードを語ることのできる方。計3名の対象者に、60分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューは同意を得た上で録音し、逐語録を作成した。その後、ナラティブ分析を行った。

### 分析結果・考察

分析の結果、地雷系ファッションを選ぶに

至るには二つの経路があることが明らかになった。一つは幼少期からフリルのついた可愛い服を好んできた結果、自然な形で到達する経路であり、もう一つは、精神的な不調をきっかけに「自分の軸を持ちたい」という思いから選択した経路である。いずれの場合も、地雷系ファッションは単なる流行ではなく、着る人の価値観や心理的な必要性和結びついてきた。

地雷系ファッションを纏うことは対象者たちに顕著な心理的变化をもたらしていた。対象者たちはそれを「完全武装」や「お守り」と表現し、身につけることで自信を持って行動できるようになったと語った。他者の視線に対する捉え方も変化し、以前は否定的に受け止めていた視線を気にしなくなっていた。さらに、対象者たちは一般社会から「変わっている」と見られる可能性を認識しつつも、地雷系コミュニティや理解ある友人から肯定的に受け入れられる経験を通して自分らしさを確立していた。地雷系ファッションは、一般的な「女の子らしさ」の規範から距離を取りつつ、共有された美意識によって孤立を回避する手段として機能していた。

対象者の語りから、現代の若い女性にとって地雷系ファッションは自己肯定感を高め、精神的な強さを獲得し、自分らしく生きる道を探る上で、重要な役割を担っていることが明らかになった。「他人受けより自分受け」を重視したスタイルが支持される現象は、社会の規範と個人の価値観との間で折り合いをつけながら自己表現を模索する、現代の若者の姿を象徴していると考えられる。